

デュランティエールのリアリズムと 『アンリエット・ジェラルルの不幸』

滝澤 壽

始めに

ルイ-エミール-エドモン・デュランティエール（1833-80）、ペンネームは単にデュランティエールとは言っても、今日では1850年代フランスのリアリズム運動の闘士として、文学史の片隅に辛うじてその名を残すに過ぎない。あるいはまた、今日ではリアリズムの金字塔とされる『ボヴァリー夫人』攻撃の一番槍として、フローベール研究家の時に冷笑を買うに過ぎない。確かに、彼のリアリズムの文学理論はその歴史的価値は有しても、時間的に限られたこの時代の一過性のものだったし、クロワッセの隠者が終生氣にし続けた酷評は、彼の理論と批評眼の狭隘と偏頗を証すものでしかない。しかし、彼の残した幾つかの小説はその心酔する師シャンフルーリの小説と同様に、バルザックやスタンダールといった先人達の壮大な世界に決して比肩しうるものではないとしても、その歴史的役割だけに止まるべきものであろうか。事実、従来ややともすればその主張するリアリズムの理論の検証と断罪でこと終わりとして、実作の検討がなおざりにされてきたきらいがある。そもそも芸術創造に限らず、理論と実践とはしばしば乖離するものであり、この乖離が皮肉にも意外な佳作を産むという事態も珍しくはないのである。

本稿では、先ずデュランティエールのリアリズム理論を概観し、次いでこの理論に基づく批評の実践として彼の『ボヴァリー夫人』及び『感情教育』評を改めて検証した後、処女小説『アンリエット・ジェラルルの不幸』（1860）に焦点を絞って、実作を具体的に検討してみることとする。

I. デュランティエールのリアリズム理論

パリ旧2区役所に残る出生届によれば、「ルイ-エミール、母エミリー・デュランティエール、父不詳」とされ、しかもその姓は偽名であり、現在では両親は確定されてはいるものの、母ラコスト夫人が一時プロスペル・メリメの愛人だったことから、この文豪の隠し子だという伝説に包まれることになるデュランティエールは、宮内庁勤めの傍らシャンフルーリやリアリズムの画家クールベ等のたむろしていたカフェに出入りする作家志望の文学青年であった。「フランス現存の優れた知識人の十指に入る」（『リアリズム』第4号）と讃え、その思想には個人的に付き合い前から大きな影響を与えられたと告白する彼が師と仰ぐ、当時のリアリズム文学の旗手シャンフルーリと親交を結ぶのは1856年の夏とされる。そしてちょうどこの年の7月10日、パリのシャブタル高等中学校の級友ジュール・アセザ（ディドロ全集の刊行

で名を残す)と語らって一部25サンチームの同人誌的小文学雑誌、その名も「リアリズム」を創刊する。同人誌的と仮に形容してはみたものの、他のペンネームも含めてデュランティー個人の執筆記事が多く、むしろ当時生まれては消える多くの泡沫新聞・雑誌の類を指していると解してよい。この「リアリズム」も再び創刊号と銘打った同年11月15日号から数えて6号目、翌1857年4月-5月号を以て終刊となっている。時あたかもフローベールの『ボヴァリー夫人』が『バリ評論』に掲載(1856年10-12月)、有名な文学裁判が行われ(1857年1月31日開廷、2月7日無罪判決)、ミッシェル・レヴィからその単行本が刊行(同年4月16日)、洛陽の紙価を高らしめ、リアリズムをめぐる論議が一層白熱化した時期に当たる。

デュランティーのリアリズム理論の概要は、二度目の創刊号巻頭に掲載され、念の入ったことにその記事の名も「リアリズム」なる文章に先ずは窺われる。

「『リアリズム』とはいかさまと怠惰に対する真摯と精進の論理的な異議申立てである。この異議申立ては、現在という明確な時点において、人心を覚醒し、真理を愛する心情に向かわせるのに必要なものであるという意味で、それ自身、新しい思想である。[……]時代を真摯に描いた作家達は、芸術家としても、実践家としても、他の作家達よりも優れており、より強い知性と感情とを持っていた。[……]『リアリズム』というこの恐ろしい語は、流派の反対物である。リアリズム派などというものはナンセンスであり、『リアリズム』とは個性の率直かつ完全なる表出を意味し、因習、模倣、即ちあらゆる種類の流派を攻撃する。[……]『リアリスト』は事物を前にして、自己の本性、自己の気質に従って生じてくる感覚を表現するのである。」

彼の主張する流派ならざる新しいリアリズムのキーワードは「真摯」であり、何よりも「芸術に真摯さを求める」がモットーとなる。同じく同号に掲載した「文学作法についてのエスキス」でも、自説を補足している。

「『リアリズム』とは要するに、自分が生きている社会環境や時代なりの正確な、完全な、真摯な再現である。[……]この再現は万人に理解されるように、出来るだけ簡明でなければならない。」

12月15日付の第2号では、「わかってくれない人々のために」という皮肉な標題の下に、前号が惹き起こした数々の批判に答える形で、自説をさらに補足説明している。

「『リアリズム』は絵画、小説、及び演劇から歴史性を追放する。それはいかなる虚偽も混じらぬようにし、他人の知識を借りて済ますことのないようにするためである。

「『リアリズム』は同時代の研究のみを要求する。そこでは何も歪めず、何物もその正確な釣り合いを保たなければならない。」

この研究において過ちなき最良の方法は、人間の様々な側面のうち、最も目に見える、最も理解しうる、かつ最も変化に富むものである社会的側面を表現しようとする考えを常に抱き、そして大多数の人間の生活に関連し、本能、欲望、情念の世界によく起こることを再現しようとする考えを抱くことである。

「『リアリズム』は上記により、哲学的、實際的、実用的な目的を芸術家に与えるが、娯楽の目的を与えることはないので、芸術家を高めるものである。

「『リアリズム』は芸術家に有益な真実を要求する。とりわけ、慣習上貴賤の違いはあるが、何らかの社会階層の情景に教訓や感銘を見て取り、かつこの情景を完璧に表現し、再

びそれを社会全体に関連させることにより、この情景から先の教訓や感銘を常に引き出し、てくるような感情と観察を要求するのである。」

先の「真摯」に加えて「真実」が、そして「歴史性」や「文献考証」の追放、「同時代性」の追求、「社会的側面」、「社会的効用」、「実用」そして「教訓」の重視、等々が彼の論のキーワードとなっている。真摯リアリズムの唱道者、あるいは師ジャンフルーリによれば「小リアリズム」の立法者には、今日の我々から見ると意外に古い殻の破片がその尻尾に付いているが、文体や形式に関しても同然で、師ほどではないにしてもやはりそのあまりに素朴な考え方は、彼の芸術の最大の弱点であろう。

「書くことは話すことと同じく簡単なことであり、文体は道具であって、目的ではないということをして人は思いもよらないのだ。」（『リアリズム』第5号）

「書物に再現された会話調は、読者に生活を想起させ、最大量の快楽を与える。」（『同』第2号）

会話や平俗な言葉の活用とその妙は実作においても彼の小説の特質をなしており、そのことは画期的であるが、文体や形式の軽視、否、蔑視が、詩や詩法の否定にまで行き着くと、大方の人は首を捻らざるをえない。一種の冗談めかして、彼は次のような「法」を提案している。

「そこでこの私は以下の法を提議する。

第1条 すべての詩を禁止する。違反は死刑に処する。世にあるすべての詩句は破壊される。

第2条 この法は遡及効果を持たない。

第3条 本法以前に書かれた詩句は流通から回収し、引き出しに錠をかけ封印するものとする。なにびともこれらの引き出しを開けんとするものは、重い罰金刑に処する。」（『詩人の増殖』、1856年7月10日付『リアリズム』創刊号）

真摯な話に戻れば、実際彼は詩というものは本質的にものごとを歪曲するものであり、散文が排斥したものを糧にして生き、未だにその秘儀や儀式を真に受ける人のいるフリーメーソンのようなものと公言して憚らないし、ことある毎に、散文より劣ったジャンルとして嘲笑しているのだ。親交のあったボードレールを後に「現実と生から絶望して身を背ける」詩人と暗に批判することになるが、『リアリズム』の終刊が『悪の華』刊行の直前であったから、本誌からはこの詩集への直接の反応は探れないけれども、詩壇の大御所V. ユゴの『静観詩集』については二つの批評記事を書いている。題名を「ヴィクトール・ユゴの『静観詩集』あるいはロマン主義の暗い奈落の巨大な深淵」とし、その影響力は認めながらも「いかさま師たることも楽ではない」と揶揄する姿勢にすべてが顕れている。

散文の分野、即ち小説にちょっと触れておけば、18世紀の称讃者であったデュランティーはリアリズムの先駆をなすルサーージュ、心理小説『マノン・レスコー』のアベ・ブレヴォー、とりわけ『ラモーの甥』のディドロを推奨した。彼にとってディドロは18世紀リアリズムの総括者であり、風俗の絵画的細部描写は彼を熱狂させた。より近い先輩作家であるスタンダールとバルザックはさらに直接的な影響を与えている。ゾラもバルベール・ドールヴィイも、スタンダールとデュランティーの間にあるいは「従兄弟関係」をあるいは「近親関係」を認めているように、彼は『赤と黒』の作者から多くを学んでいる。感情・心理分析、鋭利な現

実観察、情熱的な感受性、気質の衝動的流露、明晰な知性、隠された皮肉、細部へのこだわり、冷静で飾り気のない簡素な文体、等々である。ただスタンダールのヒーローあるいはヒロインはその名の通り英雄としての強靱さを秘めているのに対して、デュランティーのそれらは後に見るようにいかにもひ弱なのだ。いずれにしても彼は生前不遇であったこの大小説家の最初の認知者の一人となったのである。バルザックに関して言えば、何よりもその創造力＝想像力の旺盛さに魅せられてはいたし、当代風俗の再現は真摯リアリズムの希求の一つではあったが、「人間喜劇」のような巨大な総合化は社会の一層の複雑化の進行故に不可能に思われ、また想像力の勝った幻視家としての側面もやはり受け入れ難いものであった。そこで小リアリズムは特定の社会階層の選択を己に課していくことになるのだが、それにしてもデュランティーの選んだブルジョアや農民層の女性達には、どことなくバルザックの世界を感じさせるものがある。野心家で貪欲、頑固一徹な母親や無垢で天真爛漫な娘達である。とにもかくにも、巨人はあまり小リアリズム向きではなかったのだ。

以上、「真摯リアリズム」、「小リアリズム」と称されるデュランティーのリアリズム理論を概観した。その文芸誌「リアリズム」は既に述べたように1857年4-5月合併号を以て廃刊となり、師ジャンフルーリも既発表の論を纏めた評論集「リアリズム」を同年に刊行の後、目立った文学的な活動からは遠ざかる。明らかに彼等のリアリズムの、少なくとも理論闘争は大きな転機を迎える。終刊号に寄せたデュランティーの評論「リアリズムの生と死」、その惜別の辞が「『リアリズム』は死んだ、リアリズム万歳！」で結ばれていることは象徴的であろう。この死の中から皮肉にも、フローベールの「ボヴァリー夫人」は生誕する。次章では、デュランティーの「ボヴァリー夫人」及び「感情教育」批評を検討したい。

II. デュランティーの『ボヴァリー夫人』、『感情教育』評

1. 『ボヴァリー夫人』評

既述のように『ボヴァリー夫人』は1856年10-12月『バリ評論』に掲載された。裁判の無罪判決が翌57年2月7日、単行本発行が4月16日であるから、1857年3月15日付『リアリズム』第5号「雑報」欄にデュランティーが執筆した批評は、雑誌掲載の『ボヴァリー夫人』を評したものと看做すが、本格的なこの小説論の嚆矢をなすものである。フローベールの神経を逆撫でた「酷評」として悪名を馳せる記事は、自ずから両者のリアリズムの相違の一端を露にするだろう。短いものなので全文を以下に訳出する。

「ギュスターヴ・フローベールの小説『ボヴァリー夫人』は、描写の執拗さを示している。この小説は線画を想起させる小説の一つである。それほど入念にコンパスを使って作られている。計算され、細工を施され、すべて直角をなし、つまるところ無味乾燥にして不毛である。聞くところでは、これを作るのに数年を要したと言う。実際、細部は一つ一つ、同価値に計量されている。それぞれの通り、それぞれの家、それぞれの部屋、それぞれの小川、それぞれの草の茎が、すっかり全部描かれる。それぞれの登場人物は舞台上上がるにあたって、予め無益で興味もない山ほどの話題を語るのだが、それはただ一人一人の知性のレベルを知らしめるのに役立つだけである。執拗な描写のこのシステムの結果、小説はほとんど常に身振りによって運ばれる。手一本、足一本、顔の筋肉一つも、これを

描くのに二、三行、あるいはそれ以上費やさずには、動かないのだ。この小説には感動も、感情も、生命もないが、しかし算術家の大きな力はある。この算術家は所与の登場人物達、出来事、地方地方において有り得べき身振り、進展、土地の起伏のすべてを推算し、寄せ集めたのだ。この本は計算と蓋然性を文学へ適用したものである。私は既にこの本を読むことの出来た人々に、今ここで話しているのだ。文体にはむらがあり、それは感じてもないのに芸術的に書くあらゆる人間においてそうであるようなものである。ある時は模作、またある時は叙情、個性的なものは何もない。繰り返すが、常に物質的描写で印象は皆無だ。この作品をしかと眺めようとすることは私には無益に思われる。先の諸々の欠点がいかなる興味も奪ってしまうからだ。この小説が発表になるまでは、もっと優れた作だと思われていた。過度の研究は感情に由来する自発性にとって代わるものではないのである。」

デュランティーの批評は内容よりも形式面にわたるものであるが、フローベールが「描写魔」、「解剖魔」であり、「文献渉猟魔」であることは紛れもない事実である。ただそれをどのように解釈するかが問題なのであって、上記のように言ってしまえば確かに身も蓋もない。しかしそもそもデュランティーのリアリズムは作者の個性がその作品に内在することを自明の理としており、「感動も、感情も、生命もない」と断罪されたフローベールの標榜する「没我性」、「不感不動性」とは相容入れないし、またブルードンの影響を受けて「リアリズム、それは民衆のために文学をすることである」（『リアリズム』第2号）と考え、文学の社会的奉仕と有用論を説く前者と「芸術＝美の無償性」を第一義とする後者の溝は深いと言わざるをえない。さらに、先にも引用した『リアリズム』第2号の中で、暗に「ボヴァリー夫人」のシャルルをあてこすって、「毎晩木綿のナイトキャップを被って眠る」「こんな下らない話で面白がらせようとするのは食わせ者」、「これらのリアリストは本当の馬鹿である」として、フローベールのリアリストとしての「卑俗な性質」を難じていることも付言しておきたい。

2. 「感情教育」評

フローベールの生前において「感情教育」（1869）ほど誤解と無視に晒された作品はあるまい。従って文壇的処女作『ボヴァリー夫人』や第二作『サラムボー』（1862）に比べて、この第三作に下された批評は意外に少ない。その中でさきがけの一人をなしたのが、やはりデュランティーであった。この小説の発売は11月17日、そして彼の批評「フローベール氏の『感情教育』」が『パリ・ジュルナル』に載ったのが3日後の11月20日である。己が生きる第二帝政を巨大な空白と捉えたかのような「感情教育」、その体制崩壊直前の、デュランティーの言葉を借りれば「政治の嵐の中で人々はこの小説を待っていた」のである。そしてその小説について彼は次のように断ずる。

「フローベール氏にとって重要なことは、エゴイストで、しかし神経質な一人の男を取り巻く女達よりも、1848年前後のパリの生活全体を表現する一種の絵を描くことであったように思われる。〔……〕

作品の三分の一は芸術論と政治論でなり、それも常に同じである。次の三分の一は描写に費やされる。（登場人物達は遂にはお互いに描写し合う。）そして最後の三分の一が小説

によって占められるのだ。〔……〕こうした人物達は外部しか見えず、決して内部は見られない。〔……〕私は1857年にフローベールについて競売吏であると言った。サント-ブーヴは「サラムポー」に関して競売吏であると言った。私は昨日競売吏であると繰り返した。〔……〕主人公は現代のエゴイストで、遂には4人の女の間に居据わるのだ。〔……〕アルヌー夫人について言えば、ボヴァリー夫人に教訓を与える任務を負った女性である。

〔……〕私はとても見事に制作された断章があることは認める。フローベールは巧みな計算家であり、彼の観察領域は正鵠を射ている。〔……〕無味乾燥で、読み難く、単調な本で、絶えざる繰り返しである。しなやかさがなく、快活さも、感動も、素朴さも、創意工夫も、情念もない。〔……〕「ボヴァリー夫人」、既にかくも人工的、かくも空疎な美文であり、すべてが入念に配されたコントラストをなすこの本も、本小説に比べれば気取りのない自然さと感動に満ちている。」

デュランティーの意味する小説、小説的要素なるものが何なのかいま一つ明らかではないが、彼に限らずフローベールの小説は小説的ではないという非難は常套的に持ち出される。また「競売吏」なる用語もフローベール批判の常套句で、一作に最低数年の歳月をかけ、「全く悠々と仕事をすする男」を揶揄する言葉であるらしい。いずれにしても相変わらずの「描写魔」攻撃、「無味乾燥」、「単調」、「繰り返し」、「空疎な美文」、要するに作り物の人工性への非難が増幅した形で反復されているのだ。デュランティーの標榜するリアリズムは、同時代の研究をなし、人間の社会的側面を追求することが大きな眼目の一つであったはずであり、ある意味ではこの主張に対するフローベール流の応答であるとも言える「感情教育」とこの面から真摯に向き合っていないのは、彼には本小説の作者の実践が見えていなかったのかもしれない。推測の当否は別にして、作者の受けたショックは大きい。締め括りとして、この批評発表直後の12月3日、ジョルジュ・サンドに宛てたフローベールの手紙の一節を最後に引いておく。

「私は酷評もまた浴びました、「フィガロ」のセスナと「パリ」のデュランティーによってです。そんなものはまったく問題にはしません！ですが、あれほどの憎悪と不誠実には驚かざるをえません。」

III. 『アンリエット・ジェラルルの不幸』をめぐって

「リアリズム」が第6号(1857年4-5月合併号)を以て廃刊後、デュランティーは前年から執筆を始めた小説に戻り、その理論を実作で具体化しようとする。処女作『アンリエット・ジェラルルの不幸』である。「1856-57年に書かれた」(1860年版巻頭「緒言」)この小説は、細かい経緯は不詳であるが、「ベイ」紙に「風俗小説」なる副題を付して1858年8月24日から9月25日にわたって掲載された。この作品の草稿原稿を読んだジャンフルーリは、57年12月11日マックス・ビュッシュン宛に次のように書き送っている。

「〔……〕デュランティーの大小説草稿を読みました。熱狂しています。このような作を予期していなかったただけになおさらです。大部分の青年達と同じように皮肉屋で、愚弄家で、情け容赦のないこの若者は、ブルジョアのドラマを見出し、きちんと描かれた性格と強い論理性をもって、詳しく率直にそのドラマを物語っています。—しかし文体は見出

していません。リアリズムの影響です。〔……〕

デュランティーには将来性があります。彼のなかに単なる批評の才のみを予感したように思っただけに一層嬉しく感じています。この本は『ボヴァリー』より心に染みます。実際、あの残忍な外科医は終いには私を苛立たせるのです〔……〕。』

「残忍な外科医」の手になる『ボヴァリー夫人』より高く評価されたこの小説は、しかしながら新聞掲載後すぐに単行本にはならなかった。同人誌程度の批評誌を出したぐらいの文学青年に、出版ジャーナリズムも甘くはなかったのである。結局、紆余曲折を経て1860年（7月28日『フランス出版公報』に登録）、例の『悪の華』の出版社ブーレーマラシ・エ・ドゥ・ブローズ書店から上梓された。ブーレーマラシは最初は刊行を拒否したものの、シャンフルーリの懇請に負けたと言われている。出版契約によれば、初版1200部、著作料200フランであり、翌61年には再版されているところを見ると、同じ2フランの廉価本であった『ボヴァリー夫人』が1ヵ月で15000部売り上げたのとは比較にはならぬとしても、まずまずのデビューだったのではないだろうか。

1) 『アンリエット・ジェラルルの不幸』の梗概

アンリエット・ジェラルルは、とある地方の郡庁所在地、ヴィルヴィエ近郊バーストールネルの屋敷に住む富裕なブルジョア家庭の娘である。芳紀まさに十八歳、美しくないはずはない。父は所有農地の経営をしているが、実質的に一家を取り仕切っているのは、虚栄心が強く、強権的、貪欲な母ジェラルル夫人である。夫人は近隣との訴訟や慈善事業、土地の名士との社交、等々に余念がない。毎日のように訪ねて来る司祭や裁判所長にも支配力を揮っているのだが、特に後者とは愛人関係にあるのだ。アンリエットには兄アリストイドがいるが、仕事もせずぶらぶらしている育ちの悪いのらくら者、また叔父のコルビーは独身で、姪のアンリエットに良からぬ愛情を抱いている。以上がおおよそ、女主人公を取り巻く主要登場人物達である。こうした卑俗な環境に飽き飽きし、軽蔑を隠しきれない彼女は、引き籠もり勝ちで、田舎町の限られた月並みな気晴らしにも加わりとうさえないのである。

そんな折、町で舞踏会が開かれ、気が進まないアンリエットも母の命令には背けず、しぶしぶ参加する。そこで一人の青年と出会い、お互いに一目惚れ、相思相愛となる。控え目で内気、決して良い男とは言えないが頭の良いエミール・ジェルマンは二十歳、しかし母子家庭の一介の郡庁職員に過ぎない。二人は社会的差異を超えて、逢瀬を重ねるようになる。即ち、あれほど非行動的なエミールが、アンリエットに会いたい一心で、昼間中、恋人の屋敷の塀を大胆にも乗り越え、庭の人目に立たない片隅で忍び会うのである。二人は結婚を誓い合い、エミールはその許しを得るべくジェラルル夫人に会おうとするが、威圧を感じてなかなか決心がつかない。他方、彼は自分の母に苦渋の胸中を打ち明けるも、身分不相応を理由に諦めるよう諭される。しばらくこうした宙ぶらりんの状態が続くうち、ある朝、いつもの密会場所に駆けつける時、アンリエットはうっかり部屋の鍵を掛け忘れてしまう。部屋の机の上にはエミールから貰った彼のポートレートが置いたままだったのだ。しばらく前から妹の行動に不審を抱いていた例の兄は、部屋に侵入しそれを発見、母に注進に及ぶ。これが悲劇の始まりである。

家族会議が開かれる。仕切るのは無論ジェラルル夫人である。一つのビジネスとして金持

ちとの結婚しか眼中にない彼等は、一も二もなくエミールに婿失格の烙印を押すことに衆議一決、こんな火遊びをやめさせるべくあらゆる手段を講ずることになる。兄は妹を監視し、庭の木々を刈り込み、塀の上にはガラス瓶の破片を埋め込む徹底振りである。ジェラル夫人は娘をお説教し、また相手の身元調査を進める。エミールも遂に意を決して夫人に会い、結婚の申し出をしようとするも、余りの高飛車な態度に気押されて退散する。周りの者はそっとしてこの件に触れず、まるで腫れ物のようにアンリエットを扱う一方、秘かに皆で婿探しに乗り出す。姪に気のある叔父のコルビーは、この機にアンリエットとの結婚を画策する。(ちなみに『ナポレオン民法典』第1巻第5編第1章第163条によれば、伯(叔)父と姪、伯(叔)母と甥の婚姻は禁止されているが、続く164条では重大な理由がある場合には、政府はこの禁止を解くことが出来る、と規定されている。)しかし、姪に軽くあしらわれて深く傷ついたコルビーは、これを恨み復讐を企む。彼の友達に放埒を尽くした大金持ちの六十男がいて、近隣の城で余生を送っているが、これがまた年甲斐もなく伊達男気取りなのだ。この男マテウスに白羽の矢が立つ。うら若き乙女を娶るに異論があるはずもなく、老人はその血をたぎらす。彼はトゥールネルの屋敷に通って来て、アンリエットを口説き始める。

一方エミール・ジェルマンはその間恋人の消息が掴めず、絶望に陥る。実はアンリエットは手紙を書いていたのだが、それを託された召使の女が専制を揮う奥様に忠勤を励んで、手渡してしまっていたのだ。そんなこととは露知らぬ彼は焦燥に駆られ、また塀を乗り越えて彼女の屋敷に入ろうとする。しかし警備のための例のガラス片で手を切り裂かれ、心痛も加わって病気になってしまう。さらにまた警察に呼び出されて、ジェラル家のまわりを徘徊しないよう警告を受けるまでになる。アンリエットの方も恋人からは梨の礫で、まさか病臥しているなどとは思いません、不信の念も萌し始め、同時に結婚包囲網に次第に進退窮ま^ひて行く。マテウスのまわりに集まった両親や例のお歴々の前で、自分には好きな男がいると激して叫ぶ場面を始め数々の反抗や、また夜陰に乗じて家出を敢行するも空しく、遂に追い詰められ、成り行きに身を任せてしまう。活路を見出す何か事の出来に一縷の望みをかけるしかない彼女を、周囲は将来の利益のために真綿で首を絞めるようにしてひたすらその日の来るのを待つ。やがてエミールはアンリエットとマテウスの婚姻公告を知る。そして二人の結婚の当日、彼は川で入水自殺する。翌日この報せがトゥールネルに届く。ちょうど新婚の二人がその城へ向かおうとしていた時である。怒濤のような怒りがアンリエットを捉える。老夫に呪詛を浴びせ、罵倒し、危うく陶器の籠をその頭に投げつけんとする。しかし直後にマテウスは中風に襲われ、彼女は夫を城に連れ帰るも、ほどなくして彼は死んでしまう。今や自由と大資産を手に入れたアンリエットは、その期待を裏切って実家と義絶し、他方エミールの哀れな母には人知れず年金を設定してやるのであった。そしてそれから二十余年後、物語の結末。「四十歳の時、マテウス未亡人、どこから見ても気品があり、知的で、美しく、素晴らしい精神と行いの持ち主、その数々の思い出の影響からか少々風変わりということより他の欠点のない夫人は、外交官であり有名な海の男である、さる提督と結婚した。」

「付言すれば、ジェラル夫人は夫の死後愛人とパリに戻って同棲、兄のアリステッドは性悪女と結婚、コルビー叔父は「女中に暇をやり、もっと若いのを雇い、その女と結婚した。」

2) 「アンリエット・ジェラルルの不幸」をめぐる批評

前節の梗概が少々長くなったが、一読して分かるように筋立てそのものは極めて単純である。そしてまた、若い男女が社会的障壁と周囲の反対に押し潰される悲恋は、「ボヴァリー夫人」の不倫と同様にこの上なく使い古された題材でもある。意図したか否かは別にして、このことはフローベールの小説が物語性の希薄化、脱物語化へ踏み出したことと表裏の関係にあるのだが、デュランティーの場合にはそのような流れに必ずしも同調するものではない。しかも善悪に二分された多分に類型的な人物造型とその布置は、通俗小説風筋書きとも相まって、明快ではあるがやや深みに欠ける印象を与えるのは否めない。主人公の二人にしても、例えばエマの「ボヴァリスム」もシャルルの「凡庸」も持ち合わせていない。アンリエットはひたすら清廉で非の打ち所のない女性であり、エミールも優柔不断でいささか消極的な性質ではあるが、真摯、誠実な好青年である。小説の深みの神話などを持ち出すつもりは毛頭ないが、「芸術家とは重層的に考える人でなくて一体何でしょうか」（ルイズ・コレ宛書簡〔1853年4月26-27日〕）なるフローベールの言に徴してみると、デュランティーの小説世界の単層性がこのあたりにも窺えるのだ。先にも見たように、彼はスタンダールの最初の認知者の一人であり、その作品から様々な理念や技法を学んでいるのであるが、例えばエミールはジュリアン・ソレルの複雑さも強靱さも、野心も自尊も、公判で階級的言辭を吐く意欲と勇氣も持ち合わせてはいない。エネルギーと魅力＝魔力に満ちたスタンダールのヒーロー、ヒロインに比べれば、影の薄い脆弱な存在でしかないのである。エネルギーとか魔力と言えば、やはりデュランティーに強い影響を与えた『人間喜劇』の作者を思い起こすが、中でもアンリエットの母ジェラルル夫人は少々悪魔的な人物造型から最もバルザック的と評される。確かに物欲と専制の権化であり、夫や愛人そして司祭を木偶のごとくに操り、娘の気持ちなど一顧だにしない性格は、『人間喜劇』の世界を彷彿とさせはするけれども、やはり多重性に欠け単純すぎる嫌いは否めない。このジェラルル夫人と対照をなすのが、エミールの母ジェルマン夫人である。未亡人であるこの女性は、母親の鑑として描かれる。善良で知的、情愛に溢れ献身的、等々といった具合であり、また息子を思うが故に、結婚が無理なことを説くのだが、その意志が堅いことを知るや宿命を受け入れるのだ。自殺の報に接した母の絶望、苦悩は、アンリエットが老夫に投げつける呪詛と自責の念と共に終章の圧巻をなしている。類型的な人物造型ということで付言すれば、善悪二極を結ぶ軸の他にもう一つの座標軸がある。それは「正常」対「異常」なる軸線である。異常とは言っても、グロテスクな、あるいは戯画化された一群の人物達を指す広義の謂であるのだが、ジェラルル氏、その息子のアリスティッドとその仲間のペラン、コルビー叔父そしてマテュス等である。リアリズムの本領をなす卑俗、醜悪がやや誇張されてはいるものの、師ジャンフルーリ譲りのカリカチュア精神が躍動する領域となっている。また、注目すべき試みとして、ジェラルル夫人の愛人の裁判所長に「ラ・ブリュイエール張り」の「ポルトレ」を趣味とする役割を与えて、トゥールネルの屋敷に出入りする人間の簡略な人物描写をさせている。即ち人物描写の入れ子構造でも称すべき戦略を、この小説は内蔵しているのである。

既に少しく触れたように、「真摯リアリズム」は長々しい描写を忌避する。筋の運びの妨げになると考えるからであり、従って簡潔な描写が原則となる。本小説でもしかりであって、第5章の冒頭、1ページほどを費やしてトゥールネル周辺の風景描写と登場人物達の動きが

語られるのが、描写らしい描写の最初のものである。その代わりにデュランティーが小説作法として殊の外多用するのが、一読して明らかなように、登場人物間の会話である。概して短い場面の転換と積み重ねによって構成されているこの作品は、ブルジョアの日常生活情景が生き生きとした平俗な話し言葉で鮮やかに再現されている。1860年初版本巻頭「緒言」で、作者自身次のように読者の注意を喚起しているのだ。

「多くの人々にショックを与える文学作法の一つの原則をここに表明することは、作家の側のある種の児戯にも似た振る舞いであるかもしれない。それは登場人物達の口の中にフランス語の誤りを体系的に残していることである。これは素朴さあるいは現実の無頓着な屈託のなさに一層近づくためである。」

労働者には労働者の言葉を喋らせたゾラにも繋がる、これは革新的な試みである。しかし現実を生に捉える手段としての平俗な言葉への執着は、当時の保守的な批評にははなはだ不評ではあったが、それはそれとしてこのこと自体は所期の目的は達している。ただ、デュランティーはややともすると、この会話に個人的ないしは一般的な意見・省察等を挟み込み、本来の軽快なリズムを損なってしまう場合もまま見られるのである。あるいはまた、彼の小説構成法上の欠点として常に指摘されるのは、形式への配慮のなさ、とりわけ大団円における性急さ、素っ気なさである。本小説の場合も例外ではなく、アンリエットの不幸な結婚と恋人エミールの自殺の悲劇に至るや、その後日談は数ページのうちにあたふたと語られ、終結してしまうのだ。あるいはまた、詳細は略すが、登場人物の年齢、日付け等の時、あるいは天候や季節にままた齟齬が見られるが、リアリズムを標榜する作家にしては不注意の誹りは免れないにしても、かのフローベールにして曜日の間違いを犯すこともあるのであるから、殊更意とするに足りないのかもしれない。いずれにしても本作は決して一流とは言い難いにもせよ、歴史的意義を超えた価値は十分あるように思われる。惜しむらくは文体を始め作全体に、世に名作と言わしめる作品に通有の、読みの抵抗感が感じられず、平板、平易に流れてしまっているようである。

最後に締め括りとして、この小説の批評略史を概観しておくことにする。先ずボードレーは「悪の華」の出版元でもあったプーレーマランに、そして詩人のテオフィル・ゴティエにいずれも好意的な感想を書き送っている。

「デュランティーの本はとても注目すべきものです。あっと驚かされました。この件では師ジャンフルーリはどれほど必要だったのでしょうか。」(1860年7月21日付書簡)

「『アンリエット・ジュラルの不幸』を読んであげる以上の、大きな喜びを彼になすことは出来ないということを覚えていて下さい。それは君に読まれるに値します。他に言うことはありません。」(1860年7月末付書簡)

「リアリズム」のかつての共同編集者ジュール・アセザは、この小説を評した最初の人でもあるが、その彼によれば「リアルで真摯、剥き出しの客観性を備えた風俗小説」であり、「メロドラマも、幻想も、不自然な効果もない」(1860年8月8日付「パリ通信」とされ、やはり好意的である。他方リアリズム嫌いでその名を馳せたバルベール・ドールヴィイではあるが、同年の9月4日付「ベイ」紙上ではそれなりの才能をデュランティーに認めている。そして既述のようにスタンダールの影響を指摘し、次いでフローベールとデュランティーの間の類似性を明らかにする。そして彼は決してジャンフルーリ、デュランティーの唱道する

リアリズムの市民権を認知はしないものの、以下のように結論している。

「フローベールの本（『ボヴァリー夫人』を指す）の利点は、あれほど多くの小さな細部をもって彼が描いている怪物のごとき者たちを、卑俗にしていけないことである。卑小にすることなく点描しているのだ。〔……〕しかしながら本と人間（『アンリエット・ジェラルルの不幸』とデュランティーを指す）は劣っているけれども、恐れずに次のように断言する。『アンリエット・ジェラルルの不幸』、今見る形でのそれは、『ボヴァリー夫人』以降刊行されたこのジャンルのすべての本の中で、最も優れた最も良く編まれた小説である。」

「ルーゴン-マッカール叢書」に着手していたゾラは、1872年12月10日付の『コルセール』紙でこの小説の成功に言及する。もっとも出版元のプーレーマランが破産してしまっただうしようもない云々、とも記している。また1878年4月8日付『ピヤン・ビュブリック』紙上では、次のような讃辞を呈している。

「精確な胸を刺すようなドラマ、真摯の調子、細部の技巧、非情な分析、20年来で最も注目すべき作の一つだ。」

出版元の倒産により改版再発行先を探していたデュランティーは、1879年8月、ようやくシャルパンティエから第2版の刊行に漕ぎ着ける。その「緒言」で彼は自作を評して書いている。

「この本を読み返すと（他人の作のように語ることをお許し頂きたい）、私は観察の堅固さに加えて、自然で無邪気な味わいを見出し、私を喜ばせます。そして最も私の気に入っているのは、この作の中に単純であらうとする銜いのない単純さを見て取ることです。」これに呼応して同年8月15日付『ルヴュー・デュ・フランス』に、E. Ch. なる署名の称讃記事が掲載された。先の「緒言」を紹介しつつ、この小説の独創性や技法の単純さを指摘した後、かくのごとく結んでいる。

「従ってデュランティー氏は極めて特別な性格の芸術家であり、まったく個人的な才能の作家である。〔……〕文学通の小説の精選された棚に、この本を所蔵しないような図書館はあるまい。」

これが『アンリエット・ジェラルルの不幸』をめぐる生前の批評の最後である。1880年4月9日、腎臓、膀胱を患って急逝したからである。47歳に満たぬ、あまり恵まれたとは言えぬ波瀾の人生であった。しかし彼の文学的遺志は、ゾラやメダンのグループの作家達に大なり小なり受け継がれていくことになる。20世紀に入ると、ピエール・マルティノーはその著『第二帝政下のリアリズム小説』（1913）の中で、この小説を「芸術の真摯派」の白眉に位置づけ、またマルティノーと並ぶリアリズム研究家エミール・ブーヴィエも自著『リアリズムの戦い』で、ジャンフルーリの影響を認めつつ師よりも弟子の小説を高く買っている。1931年、リアリズム作家のアンソロジー『リアリズムの時代』を出したエドゥワール・メニアルはその「序」で、マルティノーの見解を支持して「真摯派の最良の小説」たることを再確認し、またバルベール・ドールヴォイに倣ってスタシダール、フローベールとの比較を試みている。1942年、『アンリエット・ジェラルルの不幸』の改版第3版がガリマルより刊行され、ジャン・ポーランが「小説の未開の開拓者、デュランティー」と題する10ページにもわたる「序文」を寄せている。そして彼は「小説とリアリズムの聖者」を総括し、結語とし

てささやかな敬意を捧げている。

「確かに、彼はバルザックのような大作家でもなければ、スタンダールのような大作家でもない。彼はそれほどの天才に恵まれてはいない。それはそのとおりだ。しかしだからと言って彼が大事な作家でないとは思わない。〔……〕いかなる小説も全くリアリスティックでないということは決してなかった。大芸術家達はそこに己が天賦の才と独自色を投げ入れる。しかし根はデュランティーにあり、彼にとって小説は素朴なものである。〔……〕

「文学」が永續していくのは、所々にデュランティーのような作家がいるからなのだ。

「文学」にその本来の性質や人間感覚を取り戻させるためにである。」

批評略史の終わりに、今や古典となった二つの文学史に目を通しておく。「フランス文学史—1789年から今日まで—」(1936)においてアルベール・ティボーデは、デュランティーの処女作をバルザック以後地方生活を取り扱ったものの中で、最も洞察力に富み、また知的な小説の一つと評し、さらに付言している。

「バルザック調というよりはスタンダール調であり、フローベールの叙事詩調とはまったく正反対である。」

そしてフィリップ・ヴァン・ティーゲムもその「フランス文学史」(1949)の中で、相応の高い評価を与えているのである。

「これら二つの小説の最初の作(『アンリエット・ジェラルルの不幸』を指す)は、筆致の精確さ、構成の単純さ、簡潔な文体の明瞭さによって、フランス小説の傑作の一つと言ってもほとんど差し支えない。」

終わりに

デュランティーは文字通りの文学者だった。その長からぬ人生に、彼は三編の長編小説を始め数々の中・短編小説、リュクサンブール公園の人形劇脚本、多数の文学・美術批評、等々を残した。けれども生前、文学的成功とはほとんど無縁だった。今日から見るとあまりに偏狭なそのリアリズム理論が、手枷足枷となって文学的飛翔を阻害した、と突き放して語ることは容易であるが、ことはそれだけでは済まない。現代生活の諸相を探求する一つの方向を指示したこの原理の根本義は、意匠も新たにゾラの自然主義に生かされていくのだ。先にも引用した『アンリエット・ジェラルルの不幸』改版第2版の「緒言」の中で、20年前に「リアリズム」誌で自分が打ち出したいくつかの主張が、この自然主義者の理論に受け継がれていることに莞爾とし、彼はさらに続けている。

「原理と運動を最初に唱道し、突撃の先陣を切った我々、我等は壑壕に投げ込まれ、我等に続く者達の橋梁となった。我等が後継者達、決して敗北を喫しない星の下にあるように思える驚くべき隊長達に導かれた彼等は、遂に勝利した。〔……〕我等は現代精神の万人の努力に恐らくなにがしかのものをもたらしたのだ。」

デュランティーは真摯リアリズムの旗を掲げ続けた雄々しい、しかし報いられることの少ない戦士だった。従容として宿命を甘受した老練戦士に、偉大な後継者の一人であるゾラとメダンの仲間達は終始敬意を失うことはなかった。彼等の一人ポール・アレクシスは、「1850年の断絶」の立役者クールペとジャンフルーリに発し、1880年頃の印象派と自然主義

の勝利に至る芸術運動のバイオニアに、その死後次の言葉を贈った。

「自分の世代にあまりにも先行した、スタンダールのような先駆者は、生前に理解されることはなかったが、しかしやがて彼の時代が来るだろう。」(1884年1月11日付『民衆の叫び』)

スタンダールと『赤と黒』、『バルムの僧院』は、本人の予言通りに栄光の時を迎えた。その年若い友の思いにもかかわらず、デュランティエーと『アンリエット・ジェラルの不幸』に今のところそうした運命の激変の兆しはない。しかしながら、柔らかな光がその人と作品に徐々に当てられている。

〔注記〕

- (1) 引用文中のゴシックは原文のイタリックを、鉤括弧は大文字で始まる語を表す。
- (2) 『アンリエット・ジェラルの不幸』のテキストとしては、次のものを用いた。
DURANTY, *Le Malheur d'Henriette Gérard*, Gallimard, 1942.
- (3) 本論に引用した諸文献以外に、次の二冊の研究書に啓発、教示されるどころ大であった。
TABARY, Louis Edouard, *Duranty*, Les Belles-Lettres, 1954.
CROUZET, Marcel, *Duranty*, Nizet, 1964.